

歴史を語る建物たち

第11回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

寒河江市庁舎（寒河江市）



寒河江市役所に行くのは簡単である。

途中で道に迷っても、近くの人に聞けば、「この先を曲がったところさある、ちょっと変わった建物だ」と教えてくれるからだ。

「昭和の大合併」で財政難に

寒河江市は、昭和29年8月1日に、当時の寒河江町と周辺3村が合併して誕生した（同年11月1日にさらに1町1村を編入）。県内では、山形、米沢、鶴岡、酒田、新庄に次ぐ6番目の市であり、昭和30年前後に全国で行われた「昭和の大合併」によって、県内で最初に誕生した市でもある。

「昭和の大合併」で国は、合併自治体に対して各種の財政支援を約束したが、大合併が一段落すると、国は財政難を理由に事実上約束を反故にしてしまったため、国の支援を見越して積極的な地域づくりを行った自治体は次々と財政難に陥った。寒河江市も、昭和34年度～35年度に地方財政再建促進特別措置法の摘要を受け、今でいう「財政再建団体」（当時はこのよう

な）と呼ばれていた）となった。

それゆえ、寒河江市では合併当初から「新市庁舎の建設」を地域計画に盛り込んでいたが、上記の事情などから、予算の議会可決は昭和40年、竣工は昭和42年まで待たなければならなかった。



斬新な設計の市庁舎は、建築雑誌の表紙にもなった。
資料：『建築文化』昭和42年8月号

黒川紀章の「実験」

寒河江市庁舎を設計したのは、世界的に著名な建築家・黒川紀章（1934-2007）である。

黒川は、東大大学院で丹下健三（1913-2005）に師事した。当時、「建築界の寵児」ともはやされた丹下の研究室には、後の建築界をリードする逸材が集っていたが、中でも黒川は、在学中に自らの設計事務所を立ち上げるなど、早くからその才能を開花していた。

寒河江市が黒川に市庁舎の設計を依頼した経緯は定かでないが、寒河江市庁舎は黒川にとって5番目の作品で、初期の代表作とあってよい。鉄筋4階建ての総ガラス張り、3～4階が張り出した奇抜な外観は当時話題を呼び、県内外から多くの見学者が訪れた。なお、建物内は3階と4階が吹き抜けになっており、黒川はこれを「胎内化」と表現した。つまり、建物は“母体”であり、吹き抜けである空間（胎内）に“自然（光や空気など）が宿っている”という概念である。

その後黒川は、福岡銀行本店（昭和50年）や国立民俗学博物館（昭和52年）などにも吹き抜け空間を設けている。これは、寒河江市庁舎の設計で一定の評価を得た、言い換えれば寒河江市庁舎での「実験」が成功した証しといえよう。

市庁舎に込められた思い

寒河江市では、新庁舎を従来の「お役所的」イメージから市民生活の“精神的つながりの場”にしたいと考えていた。特に「市民対市民」のつながりを重視し、2階にベンチやテーブルなどを配した市民ホール（屋内）と市民広場（屋外）を設けた。

また、自治体庁舎には珍しく、議場が1階にあり、2階の市民ホールの床の一部がガラスブロックになっていて、議場の光が足元を照らす仕組みとなっている。これは、「議会が市民を支え、行政が市民の傘になる」というメッセージとも受け取れよう。

さらに、業務を迅速かつ正確に行うために、当時はまだ珍しかった電子計算機を導入したのも、県内では寒河江市役所が最初であった。

地元紙では、「おらが自慢の新庁舎」「田園都市のシンボル」などと、1面全部を使って新庁舎を紹介し、竣工時に天井からのつり下げシャンデリアを寄贈した芸術家・岡本太郎（1911-1996）も、「市庁舎としては日本一の建物。寒河江の市民も大いに鼻を高くしてよい」と賛辞を贈った。

往時の姿、理念をいつまでも

市庁舎は、2階の一部が増築された以外は完成時とほとんど変わっていない。自治体庁舎は機能更新や増築が多いのが一般的で、寒河江市庁舎のように40年間

使われ方が変わっていないというのは極めて珍しい。

なお、平成15年には、近代建築の記録と保存を目的とした国際学術組織「DOCOMOMO」（本部・パリ）の日本支部による「日本近代建築100選」に、山形県内から唯一選ばれている。

一方で、竣工時の理念である「市民生活の精神的つながりの場」を維持するため、市庁舎ではこれまで、Bar（酒場）やミニコンサート、版画展など、さまざまなイベントが開催されている。

世の中がめまぐるしく変わる今日、「ちょっと古いけど昔と変わらないもの」は、私たちにとって貴重な清涼剤である。

（荘銀総合研究所 研究員・山口泰史）



市庁舎設計にあたっての、黒川氏直筆の“発想の系譜”。最後に「胎内化」という言葉が出てくる。

資料：『建築文化』昭和42年8月号